



## 年間第 33 主日 (ルカ 21:5-19)

終末へのわたしたちの準備は今の生き方そのもの

「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。」  
(21・14) イエスは弟子たちがだれかの前に引き出される時を見据えて、弁明の準備ではなくイエスへの信頼こそが弟子たちを守ると教えます。わたしたちもイエスの呼びかけを自分のものとしましょう。

亡くなったわたしの父は数々の武勇伝を持っていますが、その中でもわたしが感心した話は、エホバの証人が自宅にやってきたときの話です。わたしが休暇で戻った時に、「こんなことがあった」といって話してくれました。

エホバの証人の人たちは父の家に来て、教えられたとおりの手順で父に話しかけてきました。父が家にいたということは、雨の日か、牛に与える草を切る道具の手入れをしていたのでしょうか。エホバの証人の人たちは、父を農家のおじさんに過ぎないと思っていたかもしれません。

しばらく話を聞いていましたが、しつこいので最後に「失せろ」と一喝しました。するとエホバの証人たちはひとたまりもなく退散したそうです。父が「失せろ」と言ったのだと話す様子は、場面を想像するだけでも傑作でした。この話を聞きながら、わたしは父親をあらためて尊敬したのです。

エホバの証人が活動していることはいろいろなうわさで耳にしていたかもしれません。その人たちはどういうことをしていて、どういう風に接すればよいのか、前もってわたしに聞くこともできたでしょう。けれどもいざその場面に立たされてみて、父は人間のどんな言葉や知恵にも頼らず、イエスが授けてくださる言葉に信頼を置いたのです。

聖書の次の言葉を思い出しました。「あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。」(マタイ 7・23) さすがに「失せろ」という聖書の言葉はありませんが、イエスはわたしの父に、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、授けてくれたのだと思っています。

だれでもそうかもしれませんが、弁の立つ人を前にすると、つい自分も言い負かそうとしがちです。言い負かそうとするとき、どうしても自分の言葉を探してきて、対抗しようとするわけです。

イエスはそうであってはいけないと言います。相手に思い直させ、恥じ入らせる言葉はイエスが授けてくださる。特にわたしたちの信仰を惑わせ、信仰に根差した生活を脅かす人を退けてくださるのは、わたしがひねり出した言葉ではなくて、イエスが授けてくださる言葉、知恵なのです。

今週の福音は、神殿の崩壊の予告と、終末の徴について考えさせています。社会を惑わしたり、わたしたちが信じている信仰を脅かす出来事はいつか必ず起こるわけですが、どんな不安な出来事であっても、わ

たしたちはイエスに信頼してしっかり立つ必要があります。

イエスが、終末を予感させる徴について触れるのはなぜでしょうか。たとえば親が、臨終を前にして子供たちを集め、「わたしはもう時間がない。これから言うことをよく聞きなさい」と呼びかける場面を例に考えてみましょう。いよいよ旅立とうとする父あるいは母は、子供たちを不安がらせ、脅えさせるためにそう言うのでしょうか。

そうではないと思います。今はどうしてもお別れをしなければならないので忍耐が必要ですが、その忍耐は、旅立っていく両親が子供たちに永遠の命への希望を持たせる道となるのです。別れを述べる父母の前で崩れ落ちることなく、希望のうちに立っていられるとしたら、その拠り所はイエス・キリストに違いありません。この世のどんなものにすがっても、父母との別れに気を落とさず、立っていられることなどできないからです。

イエスもそうです。しばらくするとイエスを信じる弟子たちを置いて、受難と復活を通して御父のもとに帰らなければなりません。今週朗読しているのはルカ 21 章ですが、22 章になるとイエスを殺す計画が持ち上がり、過ぎ越しの食事を弟子たちと共にし、物語は最後の場面へと進んでいくのです。

イエスが終末について語るのは脅えを抱かせるためではありません。さまざまな徴の中でもイエスに信頼して立っている人は、最後には復活のいのちを得る。試練の中にも惑わされることなくイエスを信じて生きることが確かな道となるのです。

それでも準備をしておけば安心なのではないかと思うかもしれません。子供たちが父母を見送るとき、葬送の挨拶を前もって準備するのでしょうか。きっと、直後に考えるのであって、限られた時間の中でも何かしら言葉を与えられるのではないのでしょうか。

イエスは「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい」と言います。わたしたちはイエスに拠り所を置いて立っている者ですから、イエスがおっしゃる通りにしましょう。むしろわたしたちが毎日イエスを拠り所として生きることが、立派な準備なのです。すべての出来事を、イエスに信頼を置いて生きる中で位置づけする。終末を迎えるにあたってこれ以上の準備はないのだと思います。

わたしは、世界がひっくり返るような出来事を見るとき、惑わされずに立っていられるのでしょうか。すべての出来事を、イエスに信頼を置いて生きる中で位置づけしてきた人生であれば、その日その時を揺らぐことなく迎えることができるでしょう。わたしたちは終末の日を頭の隅に置きながら、イエス・キリストを判断の物差しにして今を生きる必要があります。